

ある大学一年生との出会い

山本 淳子

先日、熊本の大学生と Facebook 上で友人になった。ドキュメンタリーや新聞記事を通してその人の生き方に感銘を受け、私から連絡をしたのがきっかけである。彼の名前は宮津航一さん。航一さんは熊本市の慈恵病院が運営している「こうのとりのゆりかご」、いわゆる赤ちゃんポストに預けられたという経歴を持つ。その後、宮津家に引き取られ、両親の深い愛情を受けて育ち、4 月に大学生になった。短距離走の選手として活躍しつつ受験勉強も頑張ったということである。名前通りに力強く生きる航一さんのことを知るにつれ、「こうのとりのゆりかご」の存在意義を強く実感する。

「こうのとりのゆりかご」が開設された 2007 年当時は、育児放棄を助長するのではないかという批判とともに、遺棄や虐待を防止できるという期待もあった。結果として、2022 年 6 月の時点で、航一さんを含め 161 人の命がここに託され救われた。生後間もない子どもを預ける人たちには、さまざまな事情がある。航一さんの場合、生後 5 か月の時に母親が交通事故で亡くなっていたことが判明しているが、中には身勝手なケースもあると聞く。しかし、若年妊娠であったり貧困であったり、あるいはどうしても公的機関に相談できないという人たちにとって、赤ちゃんポストが最後の砦であることは間違いないだろう。生まれたばかりの赤ん坊を遺棄したり、虐待したりというニュースを耳にするたびに「赤ちゃんポスト」に託すという選択肢もあったのに、と歯がゆい思いに駆られる。

航一さんは、食事をまともにとれない子どもたちがいることに胸を痛め、両親とともに、「ふるさと元気こども食堂」を立ち上げその代表として活動している。そのこども食堂は地域で歓迎され、今年 6 月に一周年を迎えた。宮津夫妻に愛され大切に育てられた航一さんは、今度は受けた愛を子どもたちやその周囲の人々に返しているのである。将来の方向性はまだはっきりとは決まっていないが、福祉関係の仕事に就きたいと航一さんは教えてくれた。大学生活、子ども食堂の活動、そして将来の職業を通して彼はこれからも多くの人たちに命や家族の絆の大切さを伝え続けていくことであろう。

今年 5 月、北海道に第二の「赤ちゃんポスト」が開設されたそうだ。このような施設の存続や拡大には、国民の理解が不可欠である。教育に携わる身として、赤ちゃんポストの社会的意義について、日々接する若い人たちと語り合っていきたい。

(山本淳子 教授 / 教員養成センター)